HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	特別寄稿 : 孤立化する若者とカルト : 親密性の綱引きをはじめた大学から
Author(s)	櫻井, 義秀
Citation	心の健康, 123, 32-38
Issue Date	2009
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/47968
Type	article (author version)
File Information	cult_kokoro.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

孤立する若者とカルトー親密性の綱引きをはじめた大学からー

北海道大学大学院文学研究科　　櫻井義秀

１　トイレで孤食？

2009 年、7 月 6 日の朝日新聞に「友達いなくて便所飯？一人で食べる姿、見られたくない」という記事が出た。読まれた方もおられよう。東大他、私立大などでトイレに「×喫煙・×落書き・×食事」という同じ図柄の張り紙がなされていた。大学当局ははった覚えがないという。複数の学生がインターネットサイトから図柄をダウンロードして貼り付けているらしいのだ。ということは、トイレで食べる学生がいるということだろう。

「友達のいない人という烙印を押される恐怖や不安があるのだろう」という大阪大学の辻大介准教授の談話が紹介され、辻先生自身複数の大学の学生から便所飯を打ち明けられた体験があるのだという。私自身は、北海道大学の学生からこのような話は聞き及んでいないが、そんなバカなと否定できない気がしている。他大学の学生相談室長から、朝校門をくぐり、授業に出て昼食を食べ、午後の授業を終えて夕方自分のアパートに帰るまでに、誰とも一言も口をきかない学生が 1 割くらいいると聞いていたからだ。確かに、大教室の講義では人と話す必要はないし、カフェテリア方式の食堂では好きなものをお盆にとってレジでカードをさしこむだけである。

誰とも挨拶をしない学生が一定数いる。彼等は仕方なく孤高を味わっているに過ぎない。朝など校舎ですれ違う学生に「おはよう」と声をかけると、学生は一瞬きょとんとする。なんで知らないオジサン（教員であっても）が自分に挨拶するのかと思うのだろう。しかし、すぐに恥ずかしそうに「おはよう」と返事を返してくる。

北海道大学の学生相談室長は挨拶を大学全体で励行したら不登校者や自殺者の数を減らせるのでないかと語る。それほどに学生の孤立感と大学への不適応、精神的な滅入り方は関係している。

そうした事情もあって、北海道大学はピア・サポートによる学生支援を今年から始めた。要は 2 年生以上の先輩がピア・サポートルームに陣取り、1 年生達の「何でも相談」に応じるという仕組みである。勉強のやり方、バイトやクラブでの人付き合い、御指南しますというわけだ。従来、まさに学生たちがサークルや部活で自主的に行ってきたことだが、このような現代の若者組において、人との口のきき方、落第の切り抜け方、就職の仕方、恋愛の作法などを学べる学生は幸せ者といえる。半数以上の学生はこのようなピア・グループに所属していない。それでもクラスや研究室、バイト先で人間関係を得ていれば問題ないが、1 年生は「自分の居場所」を探し当てるまでに不安な数ヶ月を過ごす。

現在の大学は、高校生が大学生に移行する手助けを学生支援として行っている。ピア・サポートはその一例であり、首都圏の大学では新入生のガイダンスで友達作りの時間を設けたり、同郷会の立ち上げを支援したりするのだという。学生も変わったが、大学も変わ

った。大学に子供を預ける親も同様に変わっている。「高邁なる大志」を抱いた学生諸君に訓辞するのは総長だけで、自分が何をしたらいいのか分からないと 1 時間も話し込んでくる学生相手に学生支援の方策を考えているのが筆者の日常なのである。

2　筆者とカルト問題との関わり

さて、昨今の大学生気質とカルト問題、何の関係があるのかと訝しく思われた方もおられると思う。現在、大学のキャンパスではカルトと大学が学生のピア・サポートをめぐって綱引きをはじめた。軍配はどちらにあがっているのか、最後までお読みいただきたい。

カルトという言葉になじみのない方がおられるかもしれないので、言葉にまつわる一通りの説明を先にしておこう。カルトという概念は非常に幅広く用いられているために、カルトを論じ合うと水掛け論になることが多い。「カルトと宗教の区別を教えて欲しい。」「どんな宗教も元はカルトではないか。」「反カルトもカルトだろう。」こんなやりとりを聞いたことはないだろうか。お互いにどのようなカルト概念に基づいて議論しているのかを明らかでなかったり、意図的に議論の水準をずらしたりすることでカルト論争は迷走してきた。

元々カルト（cult）という言葉は、ラテン語の cultus（耕作、養育、教養、尊敬、祭祀）に由来する米語で、ランダムハウスの英語辞典にはおおよそ、①宗教的崇拝や儀式、②人や事物への熱狂、③崇拝者の群れ、異端視される宗教、④カリスマ的教祖とゆるやかな組織を有する新宗教運動、⑤人権を侵害し、社会秩序を破壊する組織を破壊的カルトと呼ぶといった意味や用法がある。

日本では宗教学者がローマ人の多神教的宗教（祖先祭祀、神々の神殿において献げられる祭儀、皇帝崇拝）の叙述する際、カルトの言葉を①と②の用法で用いていた。また、文化人類学では土着主義運動が①と②の文脈で捉えられてきた。③と④の概念は、宗教社会学によって用いられる。しかし、①から④までの用法を知っている人は少ない。⑤の用法がマスメディアをはじめ、一般の人々にも広範に使われている。オウム真理教（現在のアレフ、光の輪）や統一教会に代表される社会問題性の強い宗教団体がその代表例だろう。

現在、⑤の用法には、心理操作という意味で洗脳やマインド・コントロールという概念が付加的に用いられることがある。カルトの社会問題性とは、勧誘手法や教化の手法にあり、彼等は人を説得するために様々な心理的テクニックや認知的バイアス、潜在意識を利用しているところにあるというものだ。西田公昭や下條信輔の著書が参考になる。

また、カルトと現代社会の関係を臨床心理の側面から知りたい方には、『現代のエスプリ　カルト　心理臨床の視点から　490』（至文堂）、カウンセリングや学校教育に関わっておられる方には、日本脱カルト協会編『カルトからの脱会と回復のための手引き』（遠見書房）が実に役に立つ。

さて、概念の説明や最近の研究を簡単に紹介したので、ここで自己紹介がてら、筆者とカルト問題との関係を述べておきたい。筆者は現代宗教の研究を行っている。1995 年のオウム事件に衝撃を受けた宗教社会学者の一人として、カルト問題の調査研究を行うと共に、

2000 年に入ってからは、細木数子や江原啓之のようなテレビ霊能者をもてはやすメディアのスピリチュアリティ・ブームの考察を進めてきた。また、筆者は、日本脱カルト協会の理事を 10 年来やっており、大学におけるカルト予防、若干のカウンセリングを教員という立場でやっている。その意味ではかなり実践的な関わりをしている人間ということになる。

３　大学のカルト問題

教員として学生の担任、学生委員、学生相談室に関わる仕事をすると、学生がカルト団体にキャンパス内外で巻き込まれたり、困った親から相談を受けたりするようなことに出くわす。そこで多くの教員は、「カルトは自分が扱える問題ではないし、そもそも信教の自由が憲法で保障されている以上、学生といえども彼等の思想信条に介入するようなことはできない」と考える。教員だけではなく、大学としてもこのように考えるとキャンパスはカルトの草刈り場となる。教職員と学生・大学院生の数が 2 万人を超えるような大学はだいたいそうだ。こういう大学に子供を通わせている学費支援者は覚悟が必要だろう。

さて、一つの大きな誤解を解いておきたい。カルトと知っていて入るような学生は一人もいないのだ。それが何で、そこにいるとどうなるかを知らないままに入ってしまったという人が大半である。「カルトにも信教の自由がある」という憲法の先生や評論家がいるが、彼等はカルトが人を勧誘する際に正体を隠したり、教説を教え込む際に情動を揺さぶって認知的錯誤をおかさせたり、或いは分不相応な献金をさせているという事実を知らない。

学生たちはカルトによって信教の自由を侵害された結果カルトのメンバーになった。しかも、新入生で勧誘され入信したものは、大学において知識を学び、教員や友人達と自由闊達な議論で思考力や判断力を磨く機会が奪われているのである。信教の自由を尊重するような宗教団体であれば、誰がカルト呼ばわりするだろうか。

もう一つの誤解として、この種の問題は専門家に任せたら解決するのではないかと教員や親が考えることがある。専門家はいない。論より証拠、行政の相談窓口や、病院・精神クリニック、或いは警察に相談されたらよい。どこもこの問題を扱ってくれないことが分かる。問題に巻き込まれてしまった当事者や家族を放っておけないと考える献身的な宗教家が相談にのったり、正義感にもえる弁護士が手弁当で事件を引き受けたり、カルトの脱会者が自助グループを作って家族へのモラル・サポートをしているのが現状である。

人がカルトに巻き込まれ、そこで様々な被害を受けるという問題には様々な局面がある。先にも述べたように心理学者や精神医学者は入信・回心のプロセスを分析してくれるだろうし、臨床的なカウンセラーはカルト経験のトラウマや脱会後のケアを扱うことになろう。司法はカルトによる違法行為を裁き、弁護士は損害賠償請求の裁判を支援する。

しかし、あくまでも専門家に問題の当事者がこうしてほしいと働きかけなければ、何一つ事が運ばない。大学おいて発生するトラブルには第一に教職員が対応するしかない。

「先生、〇〇さんがクラス（ゼミ、サークル）で勧誘して困ります。」「先生、子供が〇〇に入ったようなのですが、どうしたらよいでしょう。」メンバーになった学生が熱心であ

ればあるほど、教室崩壊や家族崩壊のような事態に陥る。こういうときに、「信教の自由」「専門家に依頼を」と他人事のような対応ができようか。問題に介入しなければ、学生や保護者の信用を失う。こういう状況において教育機関としての責任が大学に問われているのである。大学におけるカルト問題とは、突き詰めていえば大学が学生への教育責任をどのように認識し、学生が教育を受け、能力を多方面に開花させていく権利や自由をどう保障していくのかという問題なのである。

大学におけるカルト予防のオリエンテーションやカウンセリングの実際は、先に挙げた脱カルト協会の『カルトからの脱会と回復のための手引き』に譲ることとし、本稿では現在大学においてカルト勧誘被害の典型となっている擬装サークルの問題を扱おうと思う。

名前や活動内容を明らかにしては新しいメンバーを勧誘できないカルト団体は、様々な擬装サークルを立ち上げて学生を入れ込んでから、徐々に教化して見込みのありそうな学生のみコアメンバーとする。この種のサークルは、現代の若者が持つ人間関係や大学が抱える諸問題を巧みに利用しており、学生相談の一つの潮流になりつつあるピア・カウンセリングを十年以上も前から実践していたのである。

4　若者と親密性の変容

なぜ、ピア・サークルが若者にとって重要性を増しつつあるのか考えてみよう。

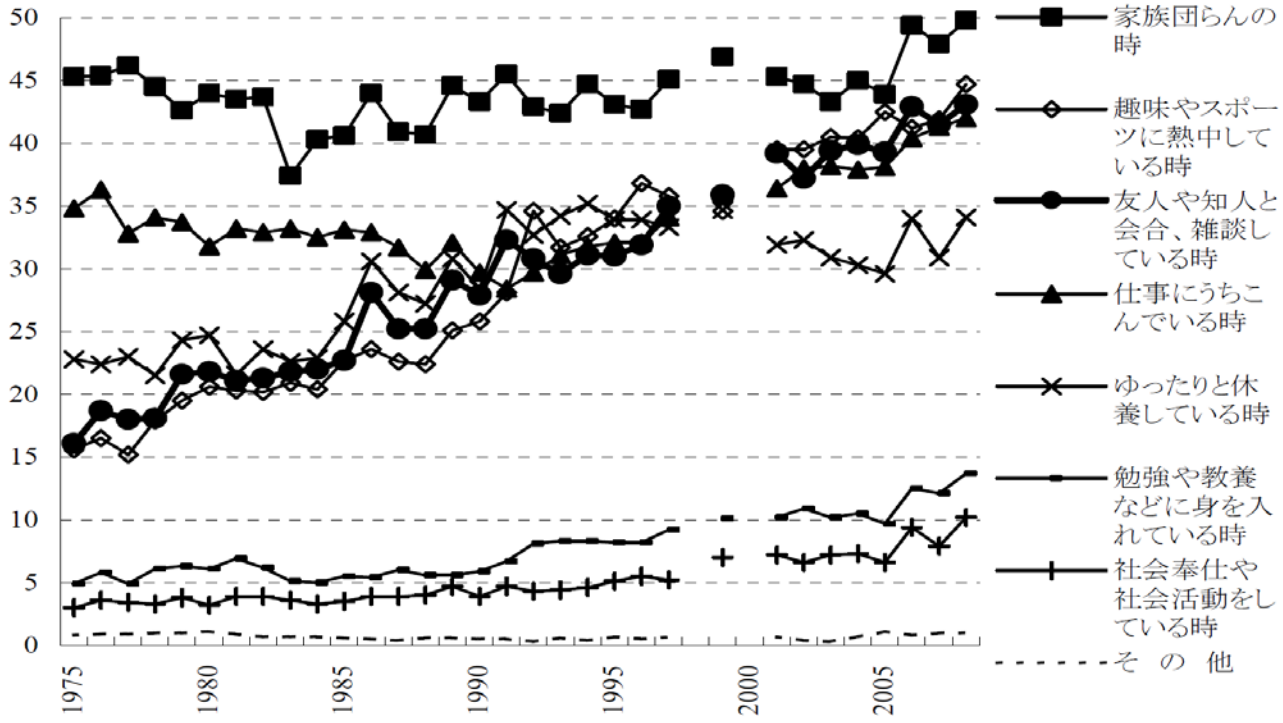

図１　「充実感を感じるとき」

出典『国民生活に関する世論調査』各年　内閣府大臣官房政府広報室

「国民生活に関する世論調査」では、「充実感を感じるとき」という項目について、1975年から2005年まで調査している。30年間の顕著な変化として、「友人・知人と一緒にいるとき」「趣味やスポーツに熱中しているとき」が充実感を感じるという人が増えてきている。

家族団欒や仕事の時間が充実しているという人が多い一方で、社会奉仕や教養的なことに時間を割くゆとりは全く高まっていないことも注目しておきたい。つまり、家族を養うべく働いてその疲れを語らいや趣味で癒すだけに生活時間の大半が費やされているのだ。

もっともこれはオジサン・オバサンの話かもしれない。若者については青年意識調査が参考になる。家族・仕事の割合が当然下がる。友人・仲間との語らいが断然高い。気になるのは親しい異性といるときが 30%程度しかないことで、同性同士群れている方が異性といるより楽しいというのであれば、晩婚化・少子化、はては「おひとりさま」もやむなしといったところだろうか。

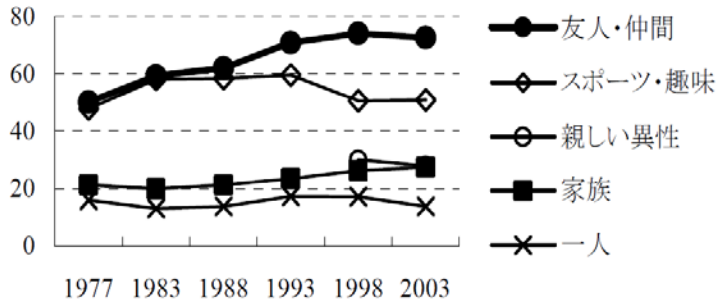

図２　「充実感を感じる時や相手」『世界青年意識調査』各年　内閣府政策統括官

ともあれ、若者にとって友達がいるかいないかは人生の一大事であることが理解していただけたのではないか。じゃあ、若者が共に飲み、語らい、遊び、行動する姿がそこかしこに見られるだろうか。

喫茶店は流行らない。会って話をせずとも携帯メールがある。コンパで大いに飲むか。酌をするのはオジサンの教員であって、学生は好きなドリンクをてんでに楽しむ。集まりも悪い。学生はバイトで忙しいので予定が合わせられないのだ。

一年かけて世界を漫遊するようなバカ者がほとんどいなくなり、大学生協のパックで語学留学する者が増えた。大学も大学で、講義 1 時間に予習・復習の 2 時間が加わらないようでは大学の講義ではないと大いに課題を出している。シラバスには半年前に半期 15 回分の講義予定と授業目的・習得すべき内容・参考書等を記載する。

このような次第で学生は忙しくなり、ゼミのみ出て後は試験の一発勝負、空いた時間は飲むか話すか、本を読むか山に行くかといった（筆者はワンダーフォーゲル部員だった）牧歌的な学生生活は夢の彼方である。では、どのようにして学生たちは友人・仲間との時間を捻出しているのか。

先ほどの携帯とインターネットであろう。前者は連絡の頻度、後者はメールや掲示板等への書き込みの分量が半端ではない。つながりたい、心でふれ合いたいという欲求の強さが分かる。しかも、字面でのつながりでしかないから、ちょっとした行き違いや誤解で相手をこっぴどく追いつめる（度を超した非難やブログ炎上）ことも少なくない。

５　親密性を擬装するカルトと居心地のよさを感じる若者

若者の日常にカルトは擬似的な親和性を演出するサークル活動によって食い込んでくる。

その典型は摂理というカルト団体である。「韓国カルト 日本で 2000 人『摂理』若者勧誘 教祖が性的暴行（2006 年 7 月 28 日 朝日新聞）」と報道され、北海道大学もその拠点校にあげられていた。教祖の鄭明析はメシアを称し、女性信徒を呼び出してはハラスメントを加えていたという。ソウル高裁で強姦罪により懲役 10 年の実刑判決を下されている。

この摂理が作った擬装サークルの一覧をご覧いただこう。元信者が紹介してくれたものだが、現在は名前を変えて大学内部で勧誘活動を行っているだろう。

表１　摂理の擬装サークル　東日本編

北海道　　拠点「葵」「アクロ」
仙台　　拠点「ハーベスト」「フロンティア」　団体名「スカイ」
千葉　サッカー「キッカーズ」　バレー「イーグルス」　合唱「アモーレ」　合奏「グレース」　モデル「パーチェ」
豊島　バレー・サッカー「フォルツァ」「ウィッツ」「アックス」　ゴスペル「ジュリエット」　男座　バンド「ＳＯＬ」　野球「パークス」
自由ヶ丘　拠点「レンガ」「石川」「白馬」「ローマ」　スタジオ「カサブランカ」　ゴスペル「エレイス」「セブン」　劇団「ム自由力」　勉強会「ＢＫＫ」
○○○大　サッカー「ゴールド」　バレー「ビームス」　バスケ「ライジングサン」　拠点「セレスト」「オーシャン」「クラウド」「愛国」　劇団「ファンファーレ」
町田　（セーラーズ）拠点「オアシス」「グローリー」「フェイス」　チーム「ウィングス」「ギフト」
東京全体部署　サッカー「フェニックス」　勉強会「Eagle Eye」　文化活動「Art Agent」「Art Vision」「ECO119」　合奏「ロバート」
○○大　サッカー・バレー・バスケ「セルミ」「フォルティス」
○○大　バレー・サッカー「サプリ」「ウィング」
関東部署　モデル部「クローバー」

出典　筆者の調査（2006 年）

摂理は擬装サークルに学生たちを誘い込み、親密性の誘引により絶対辞めないと幹部が見込んだもの達だけに教会組織を明かし、宗教教育を施すようになる。サークルの狙いは

勧誘のしやすさと学生の選好を見極めるところにある。宗教的関心が全くない学生はただのサークルに所属しているだけと思いこんでいる。摂理というカルトの構造が下図である。

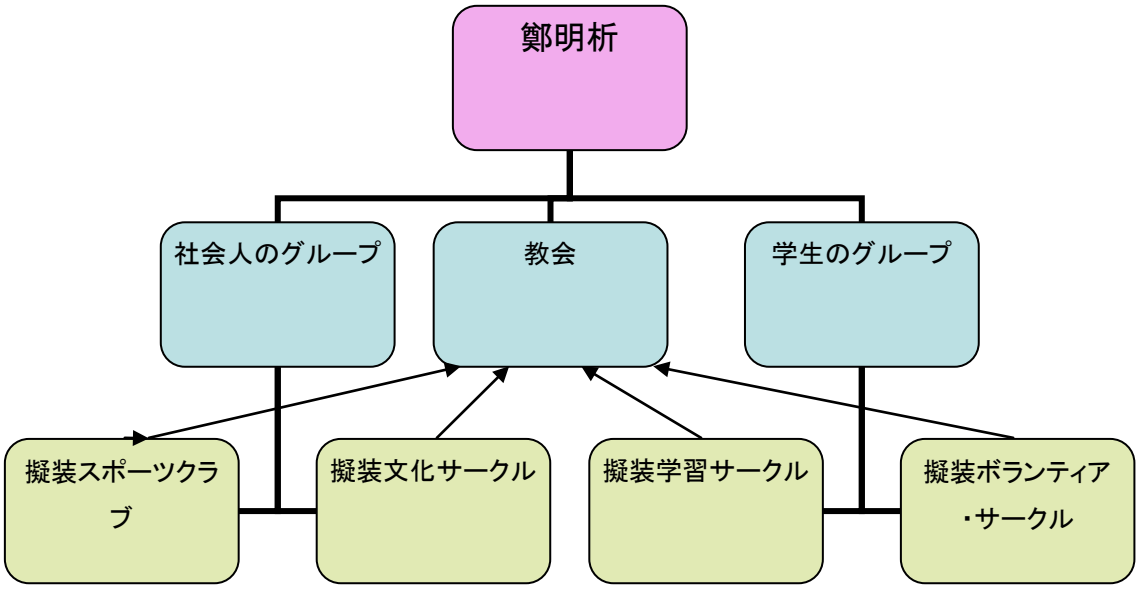

図 3　摂理の擬装サークルと宗教組織との関係

摂理の教説や教団の歴史、これまでの問題点などは拙著（櫻井義秀編,2009,『カルトとスピリチュアリティー現代日本における「救い」と「癒し」のゆくえ』）で詳しく述べている。ここでは、教説の教え込み方の特徴のみ記述しておこう。

①チュートリアル方式。摂理では教義、教説を本として刊行しない。鄭明析が説く統一教会の『原理講論』に酷似した教説が口承でノートに筆記され、先輩が後輩に一対一でわかりやすくかみくだいて教える。落ちこぼしはない。一人前のメンバーになるまでに非常に時間をかけて一人一人を育てていく。ところが、大学では大教室で標準化された方法で教え、評価は半期に一回の試験。どちらが学習の深化が図れているか自明だろう。

②ピア・グループ。新メンバーが教会活動について来ているか、モラールが下がっていないか等、常に気にかける。メールや電話で頻繁にやりとりしたり、共同生活をしたりしながら疑似家族的な親密圏を共有する。家族よりも家族らしい、恋愛関係よりも無償の愛らしい関係のなかで摂理的信仰を定着させる。彼らは教説そのものを信用しているのではなくて、人間関係の濃密さ、リアリティを信じているのである。但し、脱会の意志を示すと翻意させるべく泣き落としと地獄へ行くぞという脅しが加えられ、無理と分かれば一切の付き合いが断たれる。そこではじめて、閉鎖的な擬似的親密圏であったことに気づく。

③人生観、世界観を直接的に教える。大学はマックス・ウェーバー以来の講壇禁欲を重視するために、教員が直接事の善し悪し、道徳などを教え込むことはない。人間や世界、歴史や自然界の複雑さ、文化や価値観の多様さを情報として提供し、判断は学生に任せてい

るので、学生の中には決然と言い切ってくれる「かっこいいおとな」を求めるものもいる。

実のところ、初等・中等教育の教え方に摂理の教え方は似ている。「先生が好きだから、学校へ行く」と子供は言う。「この人なら信頼できるから、私も勉強する」とメンバーは言う。ところが、大学では研究業績（査読論文の数）で教員採用を行っているために、時に人間的魅力や教える技術に欠けたものが教壇に立つことがある。稚拙な語りでもコンテンツが優れていれば、能力ある学生はこの種の教員を利用して知識欲を満たすことができる。

しかしながら、幼稚園から高校まで親や教師に手取り足取り育ててもらい、授業が分からなければ塾でチュートリアルの指導を受けた学生たちは、なにゆえ大学に入った途端に「自分で勉強しなさい」などと突き放されるのかと怪訝に思うだろう。

筆者が驚いたのは、大学生相手の家庭教師が業態として成り立っているという話だ。某大学生協の家庭教師募集の掲示板に「マクロ経済学を教えてくれる人を求む」と大学二年生が書いていたという。呆れないでいただきたい。これが現実なのだ。

それで筆者は新入生のオリエンテーションに教務委員長としてこういわざるを得ない。「皆さんに覚えておいていただきたいことは、分からないことを人に尋ねるというのは恥ずかしいことではないということです。授業で分からないことは教師や先輩・友人に尋ねましょう。それがきっかけで先生と知り合いになれるし、友達もできるでしょう。」

学生がカルトの提供する居場所にはまってしまうか、大学が教育機関として学生の信頼を早めに勝ち得ることができるか、カルト予防の最前線がここにあると筆者は考えている。

擬装サークルにまず入らせない。大学ができることはここらへんまでではないか。その先、過激な宗教組織に入り込んでしまうと、教職員の説諭や友人の助言、家族の懇願では戻ってくれない。カルトたるゆえんである。そして、カルトのメンバーとして正体を隠した勧誘を大学で行ったり、霊感商法で市民に迷惑をかけたりして貴重な人生の一時を費消している学生が今もってなくならない。実に残念だ。

大学がカルト予防を心がけ、カルトメンバーとして卒業生を輩出しないだけでも、随分と大学の社会貢献になる。カルト団体も一定規模になると学歴社会にあり、トップは名門大学の卒業生が名を連ねる。大学の社会的責任とは、知的生産性の高い人材を養成することもさることながら、健全な常識や倫理感覚を持った市民を育てることではないかと思う。

本稿では、人間の精神を従属化させていくカルトの認知・心理統制のメカニズムや社会問題となっている彼らの活動について具体的にふれることはできなかった。参考文献にあげた二冊の新書は、オウム真理教（アーレフ）、統一教会、摂理、聖神中央教会、ヒーリングサロン「神世界」、スピリチュアリティ・ブームの問題性など扱っている。特に、2009年5月に出した拙著『霊と金―スピリチュアル・ビジネスの構造』（新潮新書）は、朝日・読売・東京・中日新聞各社で書評に取りあげてもらい、筆者がこれまで書いた本のなかで初めて分かりやすい、面白いといってもらえた本である。参照していただければ幸甚である。

参考文献

櫻井義秀,2006,『「カルト」を問い直す』中央公論新社。
櫻井義秀・三木英編,2007,『よくわかる宗教社会学』ミネルヴァ書房。
櫻井義秀編,2009,『カルトとスピリチュアリティー現代日本における「救い」と「癒し」のゆくえ』ミネルヴァ書房。
櫻井義秀,2009,『霊と金―スピリチュアル・ビジネスの構造』新潮社。
柴田悠,2009,「若者における友人関係像の変容―国際社会調査データのパネル分析と日本製テレビドラマの歴史分析から」『社会システム研究』12。
下條信輔,2008,『サブリミナル・インパクトー情動と潜在認知の現代』筑摩書房。
高木総平・内野悌司編,2008,『現代のエスプリーカルト　心理臨床の視点から　490』至文堂。
日本脱カルト協会編『カルトからの脱会と回復のための手引き』(遠見書房)
西田公昭,2009,『だましの手口―知らないと損する心の法則』PHP 研究所。